



太田 理香：「海藻の海」水槽 —アクアワールド茨城県大洗水族館—

アクアワールド茨城県大洗水族館は、旧大洗水族館と隣接する敷地に昨年3月オープンした(図1)。「茨城の海と自然・世界の海と地球環境」を基本テーマにっており、施設規模や展示物も大幅に充実させている。当館で人気を集めているのは、太平洋をバックに繰り広げる壮大なスケールのイルカショー、日本一の種数を誇るサメ水槽、かわいいマンボウたちが泳ぐマンボウ水槽などなど。そして密かに人気を集めているのが、今回紹介する「海藻の海」水槽である。

エントランスを抜けて少し進むと、右手に屋外の水槽が見えてくる。それが「海藻の海」水槽である(図2)。館内の通路から水中を観覧できるようになったこの水槽には、太陽の光を浴びながら波に揺られる海藻、その合間を悠々と泳ぐ魚たち、そしてヒトデ、ウニなどの無脊椎動物が生活している。「この水槽は海とつながっているのだろうか」そんな錯覚を抱かせる。しかし、実際には水槽が海とつながっている訳ではない。水槽には造波装置と干満装置が備え付けられており、自然の海さながらの演出をしているのだ。茨城の海は、暖流と寒流がぶつかる潮目の海であり、様々な生物を見ることができる。海藻に関しても同様で、特に大洗の磯は海藻が豊富に生育している。この自然豊かな茨城の海を再現したのが「海藻の海」水槽である。

水槽底面には傾斜があり、満潮時の最浅部の水深は約1m、最深部で約2mある。1時間に1回のサイクルで設定されている干満の水位差は約30cmである。波造装置は24時間作動させていて、常時海藻が揺らぐ状態を保っている。展示している海藻は、ワカメ、アラム(図3)、オオバモクなど身近なものが中心であり、我々飼育員が地元で採集してきたものがほとんどである。

日本人にとって海藻は、馴染みの深い資源である。「知って



図2 海藻水槽

いる海藻は？」と聞くと、ワカメやコンブ、ヒジキなど食材として使われる海藻の名が挙がることが多い。しかし、多くの人が認識しているそれらの海藻は、スーパーや市場に並ぶものであり、それらが海の中でどのような様相を示しているか、まして、資源となる海藻以外にも多くの種類が存在するというを知る人は少ない。海藻に対する関心が、希薄だというのが事実である。

私は学生時代、海藻のフロラ調査をシュノーケリングで行ってきた。個人的にも海に潜る機会が多い。それらの経験の中で、海藻が織り成す景観の美しさ、そして海藻と他の生物との関わり合いを知った。海藻は資源としての一面だけでなく、実に興味深い魅力を持っていると思う。少しでも多くの人に海藻に対する関心を持ってほしい。紅、緑、褐色などの美しい色の違いに気付いてほしい。そして、海藻も含めた



図1 新しくオープンしたアクアワールド大洗



図3 「海藻の海」水槽のアラム



図4 「海の生き物科学館」内の海藻コーナー

「海の中の世界」を知ることが、海の保全に対する人々の意識を高めるのではないだろうか。

当館には、水槽で展示している生物を中心に生体、及び生態について詳しく学ぶことのできる「海の生き物科学館」というスペースがある。そこにはサメやペンギンのコーナーと共に、海藻のコーナーが常設されている（図4）。ここでは、水深と海藻の種類の関係、海藻の色、季節的な消長など様々なテーマについてパネルや模型等を用いた学習ができる。水槽で生きた海藻を観察し、その知識をこの科学館で習得する。

そのような工夫をしている。

しかし実際には、水槽に展示しているスガモとアラメの違いにさえ気付かない人々も多い。やはり興味の対象は「魚」にあるようだ。それでも人々は「海の中は、こんな風になっているんだね。なんだか海に潜ったような気分だよ」と喜んでいる様子。自然光を浴びながら、波に揺られる海藻の合間を泳ぐ魚たちの姿は、人々の心を和ませる。海に潜った経験を持つ人になら、想像できるであろう。あの光景である。この水槽は、潜らずにしてその感動を体感できるのだ。

海の中を覗いたことのない人は、その素晴らしさを知ることができる。そこから「海の中の世界」に興味を持つ人もいるのではないだろうか。「海藻の海」水槽はそのきっかけ作りに一役買っている。海中の素晴らしさを忠実に伝えるためにも、海の一部を切り取ったような水槽を人々に提供できたらと思う。

（アクアワールド・大洗）

アクアワールド大洗 魚類展示課 太田理香
〒7311-1031 茨城県東茨城郡大洗町磯浜町 8252-3
TEL: 029-267-5151
FAX: 029-267-5920